

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

ベラルーシ共和国初代大統領



アレクサンドル・G・ルカシェンコ

ベラルーシ共和国初代大統領。1954年ベラルーシ・モギレフ地方生まれ。75年モギレフ教育大学卒業(歴史・公共科学教職課程)。85年ベラルーシ農業アカデミー卒業(農・工業生産分野の経済専門家課程)。82年より農・工業複合体の管理職を数多く歴任。90年ベラルーシ共和国議会銀に選出される。93年国会の汚職撲滅委員会委員長に就任。94年ベラルーシ共和国初代大統領に選任され現在に至る

インタビュー 井原甲二氏

東西冷戦構造崩壊から10年……。いまなお市場経済と民族紛争の嵐が吹き荒れる世界に、人類は希望と未来への光を見出すことができるのか。なかでも74年間も続いた共産主義の呪縛に囚われてきた旧東西諸国の真実の姿を知ることが、新世紀を展望し、新しいアイデンティティを構築する上で、欠かすこと



のできない要素の一つであろう。そこで、東西ヨーロッパの中心に位置するベラルーシ共和国の若き国家元首であり、西側マスコミからは「共産党回帰主義者」「ベラルーシの独裁者」と揶揄されるルカシェンコ大統領の素顔に迫り、旧東西側諸国から見た世界を考えてみる。そこには、日本人の豊かさ引き換えに失ってしまった厳しい現実感覚、21世紀を逞しく生き抜くための智慧があるはずである。



着々と進む独立国家としての基盤の構築

井原 このたびは大統領閣下のお招きによって、東ヨーロッパで最も美しい森の都といわれているミンスクを訪問させていただき感謝いたします。そして、こうして大統領閣下にじかに、親しく面談できますことを私は大変光栄に思います。ルカシェンコ大統領閣下は1994年7月に85パーセントという国民の圧倒的な支持を得てベラルーシ共和国の初代大統領に就任されたと聞いております。ベラルーシ共和国は1991年に74年間にわたるソビエトの共産中央政府の支配から解放され、公式に独立国家として国際社会に承認されたのですが、まさにこの十年という歳月は激動の時代であり、大統領就任後のご苦勞は筆舌に尽かせないものがあつたと拝察いたします。まず大統領閣下のご氏名とこれからの課題と志について伺いしたいと思います。

ルカシェンコ おっしゃるとおり、大変に厳しい歴史的な時代でしたし、おそらくこれからの十年も独立国家

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

としての基礎構築に私自身の責任の重さをひしひしと感じて政務に取り組んでいるところです。経済・政治、それから文化の発達のためのポリシーはすでに用意・実行されておりますが、ともかく元首としての私のモットーは一言で言えば、人々の生活を改善するために力を尽くすということに尽きます。国民の生活水準を向上させるために、また、大量の失業者を出さないために、そして老後を保証するためにはどうしたらよいのか、こうした課題が私と政府にとって中心的なポリシーとっていいでしょう。

そして、経済的な戦略として優先されるべきこととしては、商品の輸出とサービスを拡大すること、つまり市場経済システムの機能づくりと、受託の建設、農業部門を発展させる国営管理体制システムとの調整、これらが最も重要な柱となります。決して用意に達成されるわけではありませんが、国内的安定と規律と秩序に依拠しながら、社会的に方向づけられた市場経済のコンセプトを築いていくのが私たちの歩むべき道であると認識しています。しかもその市場経済は国民の伝統と精神風土にマッチしたものでなければなりません。

井原 可能な範囲で民営化、市営化が徐々に進んでいるということですか。

ルカシェンコ 私たちの経済政策で第一主義的な位置を占めているのは現実の経済を復興させ強化することです。なぜかといえば、そのことこそが強力な社会政策を採り、輸出力を強め、社会を安定させるための鍵だからです。現実経済のダイナミズムこそが科学や教育、文化の発展の基礎であり、それらを発展させることがすべての人道的な領域を豊かにする基礎なのです。国家体制の改革が開始されてからの全期間、すなわち 1991 年以降ベラルーシでは参禅の事業所が全面的ないしは部分的な非国有化を終えています。それらが占める割合は工業製品で約 40 パーセント、土建関係で 60 パーセント以上、有料サービス部門で 30 パーセント以上、小口物流部門で 70 パーセント以上となっております。現在、私有化された事業所で雇用されている労働力は六十万人を超えていますが、それは経済次号にかかわっている人口の十五パーセントになっています。とにかく効率性の高い経済を伴って、世界的な権威主権を持った民主的法治国家を創ることです。

その意味では国際分野でも何より優先しているのは、あなたたち日本人はもちろん東アジア、ロシア諸国との交流を深め、さらにアメリカはじめ西側の国家との交流を行う際、ベクトルの多面性という原則を築くこと、そしてまたあらゆる面で中央アジア諸国との CIS (独立国家共同体) との協力関係を密にしていくことです。

ベラルーシの置かれている地理的条件はヨーロッパの中心にあるわけですから、西からも東からも経済的に大変強力な国に囲まれているのですから、私たちはそれぞれの国と仲良く交流を深めて生きたいと思えます。もちろん NATO (北大西洋条約機構) が東へと拡大することも歓迎します。私は政治が発達しているかどうかは、文化の発展に以下に力を入れているかどうかで決まると考えております。したがって私の文化へのポリシーは我々の国家と国民の伝統、つまり何千年もかかって作られて伝統を守り、さらに新しい時代に向かっていこうということにあります。そして、この新しい時代においてベラルーシは発達した強力な国になることを望んでいるのです。

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか



世界は紛争を繰り返している場合でない

井原 ベラルーシ共和国は先史時代からの古い歴史を持ち、ヨーロッパ全人口の三分の一の割合を占める誇り高いスラブ民族の発祥の地ですが、これまでの歴史は決して平坦なものではありませんでした。十四世紀にはリトアニア大公国の支配下に置かれ、十六世紀にはポーランドの支配下にあり、十八世紀にはロシア領になりました。そして、十九世紀、二十世紀には再び数々のヨーロッパにおける紛争での戦場となって、悲惨な時代を強いられてきました。

十五世紀から十六世紀のころのベラルーシ文化は黄金時代を謳歌したといわれますが、近代に入ってからベラルーシの国家と国民は厳しい国際情勢の中で筆舌に尽くしがたい苦勞を重ねてこられた。しかし、そんな国難と試練の中でもベラルーシの国家指導者と国民は、希望を失うことなく一致協力して血のにじむような努力を重ねてこられました。いま東西冷戦構造が終結して十年の月日が立ちましたが、その歴史的評価についてどのように考えておられますか。

ルカシェンコ 冷戦構造の終焉については感謝しております。しかし、その後の激烈な紛争体制について私は大変な懸念を抱いています。

いずれの国もたくさん問題を抱えておりますが、だからといって紛争を起こすような状態にはないと思っております。戦争は決してあってはなりません。世界はいま経済危機に晒されていますが、全世界のすべての人々が幸せに暮らすことを願うべきであって、もっとも不幸な紛争を引き起こす時代ではないのです。その意味でもそれぞれの国が多方面にわたって発達すべきであると考えます。一面的に走ることは大変日研で、多方面にわたってお互いが協力し、すべての国家がバランスの取れた関係ができる、そういう目的の元に私たちは努力すべきです。特に日本はこうした面において最も努力できる国なのではないでしょうか。

井原 確かに日本は平和を求めてやまない国です。しかし、昨年からは日本も2001年の完全実施に向けて「日本版ビッグバン」を衣実施していますけれども、長引く不況と禁輸システム不安などが重なって、デフレや世界恐慌の心配をするまでの経済危機に陥りました。この問題は禁輸安定関連法案も成立し、時を経ずして大きく改善されると思いますが、しかし、これで抜本的に問題が解決されたわけではありません。

ルカシェンコ 今回の金融・経済危機は日本だけでなく、東南アジア全体、ロシアも含めたユニバーサルな問題であろうと思います。しかし日本は優秀な人材が集まって、大変効果的なシステムを持っている国ですから、私は近いうちに必ず経済力を回復し、この危機も克服するであろうと思っております。



チェルノブイリ惨事の後遺症

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

井原 ところで、1996年4月26日に起こったウクライナ・キエフ近郊のチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故ではベラルーシは非常に危険で悲惨な体験をされましたね。世界優雅恐怖で震撼しましたが、ベラルーシにはそのときの死の灰が70パーセントも降って人々に大きな影響を与え、不幸に陥られました。日本は核兵器による人類初の被爆国ですが、戦後五十年以上も経過するのにいまだに原爆後遺症に苦しむ人々が少なくありません。そして、不幸にして被爆したベラルーシの人々にも世界的な援助の手がもっと多く差し伸べられるべきだと思います。

大統領閣下はチェルノブイリの影響地区に事故直後から汚染の危険をも顧みずに入られたそうですね。今でも年に二、三回は直接訪問されて親しく視察なさっているとのことですが、現地の人々にとってはさぞかし勇気づけられることだと思います。

ルカシェンコ これはベラルーシに襲ってきた大変な怖い雨です。私がしばしば強調しているのは、ベラルーシがこの悲劇の原因ではないことです。原子力発電所を建設したのも、また、その運転に当たってきたのも私たちであったわけではないし、発電所の所在地もベラルーシではない。にもかかわらず、惨事の後遺症はわが国の国民に最も深刻な形で出てしまったのです。放出された放射能の三分の二がわが国の南東部を遅い、国は数十万ヘクタールにも上る最も肥沃な土地を失ってしまったのです。国のおよそ四分の一にあたる地域が、程度の差はあっても放射能汚染を被っており、これらの後遺症を克服するために私は最大の努力を払っております。

確かに私は年に数回、被害地域を回っています。その目的は汚染地区の実態を自分自身で見極め、それらの地域でどのような形の経済事業を営むことができるのかを把握することです。住民と集会を持つのはそこで何かが起きているのか、不足しているものはなにか、どういう問題があるのかなどを直に知り、大統領としてどんな分野で力を発揮し、また、どういう課題の解決に加わるべきかを確かめるためです。各地を訪問してみてつくづく痛感したことは、どこに言ってもあらゆる困難に耐えながら働いている責任感が強く誠実な人々がいることです。私たちの任務は、それらの人々に住宅や食物を保証し、乏しい国庫からではあってもあらゆる手を尽くして支えていくことです。

井原 国際的な被害者支援活動は進んでいるのでしょうか

ルカシェンコ わが国の国民が単独で戦っているというのが実情です。ベラルーシが被った被害額はおよそ二千二百五十億ドルに達しましたが、人道的活動として私たちが受けた国際的な支援は一億ドルをわずかに超える程度です。かつて日本人が背負った歴史的悲劇の思い十字架を今日のベラルーシが背負っているのです。この意味ではあなた方も私たちも巨大な破壊力を持つ核爆発という名の共通の災難で結ばれているのです。広島と長崎が二十世紀の歴史の年代記を理解する点でつながっていると同時に、チェルノブイリも同じ理解の延長上に位置する宿命を負ったのです。

そして、私たちはこの紙上をお借りして日本の皆様に感謝の言葉を伝えたいと思います。皆様は多くのことを我慢され、切り詰めながらもベラルーシのことも立ちの健康回復のために薬や医療設備を送ってくれています。特に活発な慈善事業団体のある都市として秋田、仙台、長崎、東京などが活動を展開なさ

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもちたか

ていることを私たちはよく知っております。七年間にわたる活動を店内している「笹川基金」も高く評価されています。そしてまた、日本のユニークで大規模な科学研究医療センターで長期トレーニングを積んだベラルーシの医師の数は毎年増えております。



あまりにも希薄すぎる日本との関係

井原 ベラルーシと日本を考えると、忘れてはならない人物がおられます。いまから百四十年前の 1856 年、つまり幕末から明治にかけてのロシア在日初代領事としてイオシフ・ゴシケーヴィチ氏が函館市に最初のロシア領事館を解説しました。そして彼はベラルーシ出身でした。昨年七月のそのゴシケーヴィチ氏の報告書がモスクワで見つかり、日本でも大きな話題になりました。彼の日本での功績は ハリストス正教会(国・重要文化財)の建設、 日露辞典の編纂、 写真技術の教育などがあげられていますが、この他にも計り知れない文化的な影響を日本にももたらしたものと思います。そしてまた、クラウチアンカ・ピータ駐日全権大使のご尽力でゴシケーヴィチ氏の銅像がベラルーシから函館市に送られましたが、こうした遺徳を通じてベラルーシと日本の交流がより一層盛んになることが願われます。

ルカシェンコ おっしゃるとおりです。私が国の外交政策の基本であるベクトルの多面性の立場から、私たちは東方を大変に重視しています。私たちには身につけてしまった古の真実があります。それはローマ帝国に端を発した言葉ですが、「ルクス オリент」といい、「光は東方から」という意味です。日本を含めて極めてユニークな東方文明は、文化・科学の発展に対して評価しきれないくらい多くの独自の貢献を果たしてきました。日本には学ぶべきものがあり、私たちのほうにはそれを受け入れる用意があります。四年前にベラルーシは東京に大使館を置くことを決めましたが、現在、大使館の力はますます強化されています。日本側も相互主義の原則ののった対応をされ、ここミンスクに日本大使館が置かれることを願っております。

井原 ク라우チアンカ大使によれば、過去にはベラルーシは日本にトラクターを輸出されていた実績もあり、肥料なども輸出したいと霊的に外交活動を展開されているようです。大統領閣下の率直な臆下をお聞かせください。

ルカシェンコ 日本がいま苦しい時代を迎えていることはよく知っておりますが、それ故にこそ、あなた方にとっても、また、私たちにとっても最も重要な協力分野は経済交流ではないかと考えます。それなのに 1998 年の二カ国間の貿易扱い高は 17 パーセントのアップに過ぎません。この数値では残念ながらまだ均衡が取れているとはいえません。しかもわが国は輸入が輸出を上回っています。しかしそれは理解できます。なぜなら日本からの輸入は二十一世紀に胸を張って歩けるようなニュー・テクノロジーなのですから。その中で特に注目されるのはわが国の生産企業合同体(公団)・アトラントと日本の商社・日商岩井で買わされた協力の事例です。それによってパラノヴィッチにコンプレッサー工場が建設され、また合同

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

体は冷蔵庫の生産を急速に伸ばすことができました。それからの製品を私たちは輸出に向けています。また、企業合同体ベラルーシ・オート・ミンスク自動車工場と日本企業・トヨタ電気とは長年の協力関係で支えられ、わが国は高速の高質システムを生産する設備を調達しています。このような互惠協力関係の例がたくさん生まれることを希望しています。その他、日本のシャープとかパナソニックとの計画が進められておりますが、いち早く具体的になることを願い、ロシアの金融危機が内部からそれをぶち壊しにしないように願っております。

ベラルーシでは政治的・経済的安定が保たれてすでに五年になり、開国の企業が安心して投資できることを保障しています。ただ、ドイツとの合弁会社が三百五十社も営業しているのに対して日本とのそれはわずかに二社にすぎないことを残念に思っております。しかも、二社の設立資金はトータルで六十万ドルにも満たない額です。この数字はアメリカやドイツ、中国、ポーランド、イタリアなどにもはっきりと負けています。ごく最近にはアメリカのフォード社が進出して、私が同社の代表と話をしたら投資額を七千万ドルまで引き上げることを決めたということです。

それほどベラルーシの市場はダイナミックに評価され、国内の安産性を買われているのです。その意味でも日本の大企業がベラルーシ共和国をもっと注目し、進出されることを希望しています。ベラルーシの将来はおそらく日本がアジアで持っている役割を私たちがヨーロッパでやることになるでしょう。確かに資源の乏しい国ではありますが、人々は高い教育レベルにあり、技術レベルも他の共和国と比べて高い水準にあります。

井原 二国間の政治的関係においてもよりダイナミックであって欲しいものですね。

ルカシェンコ 今日に至るまでに二カ国間に括弧とした契約法のベースがないという事実に私たちはある種の当惑を覚えます。これは正常な関係とはいえないし、問題はベラルーシ側が作ったのではなく、おそらく日本側の責任でおきたものと思っております。現在、一年を越えて日本側で検討されている商業経済協力にかかわる協定、相互投資保護協定と航空協定などの草案が、仁尾本の支持を得ていち早く効力を発するようになることを期待しています。こっけいな話、ミンスクから東京に入るためには、ドイツかロシア経由でしか飛行できないのです。



IMF との関係は独自性を重視して交渉

井原 ロシアならびに急路連連邦の国々、中国、韓国、インドネシアなどは IMF 体制の支援によって経済力の強化を進めてきました。ベラルーシ共和国と IMF の関係の今後の見通しはどのようなものでしょうか

ルカシェンコ ベラルーシ共和国は IMF に限らず、それ以外の国際金融組織とも正常で実務的な関係を築くための努力を一貫して払ってきました。しかし、IMF はなかなかベラルーシ独特の経済ポリシーを認めてくれませんでした。私はそれぞれの国家には独自の経済政策があってしかるべきだと考えています。

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもちたか

IMF のユニバーサルな性格を持っている経済法則はもちろん認めております。しかし、IMF のプランが一連の問題を解決する上で、個別的な国々の経済発展の特殊性についても合致していたわけではありません。特殊性に合致していないアプローチは、多くの場合、一時的にしか肯定的な影響を与えることはできないでしょう。有志は予算の綻びのつぎ当てに使われていて、生産設備の怪獣や経済改革には回っていないのかが実情ではないでしょうか。したがって、東南アジア諸国を襲い、その後他の地域に波及した危機に対しては対応しきれなかったと考えています。IMF は世界中のどこの国でもすべてお金で処理できるものではないことを理解すべきだと思います。また、それぞれの国家は IMF に依存することばかり考えないで、自分たちの立場をはっきり主張すべきだと思います。

井原 確かに IMF は過去におけるその日を認めなければなりませんね。

ルカシェンコ その意味でベラルーシ共和国独自の経済改革と IMF はなかなか難しい関係にありました。それでもベラルーシはこの三年間続けて国民総生産高が毎年 10 パーセント以上増大してきました。もし、世界の経済危機、ロシアの危機がなければ私たちの経済状況はさらに発展していたと思います。そうした実情を IMF は正しいと認めざるを得なくなり、最近、ワシントンで行われた年間会議の作業にはベラルーシ政府代表団も参加し、双方の協力関係を活性化させる合意が得られています。近い将来には、IMF の代表団がミンスクを訪問することでも一致が見られました。そのときに私たちは協力関係の問題を討議できます。

私たちはすべての国際組織、すべての国家と協力する用意ができております。ただし私たちの独立主権を尊重していただくということが第一の条件であるということです。

井原 ベラルーシ、ロシア、カザフスタン、キルギスタンの CIS 四カ国による関税同盟の発展の見通しはいかがですか。

ルカシェンコ これは「四カ国同盟」という統一の基礎を成すものですが、CIS の国々が熟成した問題の理想的な解決策を迫っていく能力と希望を繁栄した「異なる速度の統合」という形で実現していくものです。私たちは、全体に共通する課題も個々の国の課題も迅速に解決することのできることを目指し、互恵の協力関係を持つ CIS が、主権を持った成員国として調和を保ちつつ統合されることが可能になるような、協力関係の新しい形態の雛形を追求しているところです。

関税同盟の貿易には最大に有利な待遇が確保されることを求め、生産者には脳税率を引き下げることがを促し、統合の法的ベースを整え、外交政策の調整を促進するものとなるでしょう。将来は外資規制、関税境界線の調整なども考慮していく考えです。



西側大使退去命令騒動の真相

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

井原 東洋の政治哲学には「大国を治むるは、小鮮を煮るがごとし」という考えがあります。つまり、大きな国を治めるには小さな魚を煮るように、あまり手出しをせず煮えさせるに任せるのがよい。あまり手出しをすると皮や肉が破れて形を失ってしまう。大国を治めるときはやたらに法律でくったり、改革を急ぎすぎると帰って取り返しがつかなくなる、という考え方です。

最近、西側のジャーナリズムに「大統領の政策は旧ソ連の踏襲が多い」という批判が少なからずあります。しかし、私はそれを踏まえた上でベラルーシに訪問させていただき、色々と視察させていただきましたので、必ずしもこの西側ジャーナリズムの意見に同調しかねます。なぜなら、これは七十四年も続いた政治体制が激変したという「厳しい現実」からの出発であるということを見逃した、浅薄で観念的な心ない批判ではないかと実感するのです。西側の価値観すべてでベラルーシを批判するのは相当な無理があります。私には、大統領閣下がベラルーシ共和国初代大統領として重い責任をものともせず、現在の厳しい現実を見据えながら、まさに「小さな魚を煮る」ように慎重かつ果敢に、しかも穏健に、そして侮られぬように、ベラルーシの輝かしい未来を築くために、さまざまな現実的政策を真剣に講じられている姿に心からの同情と敬意を表したいと思っております。

ルカシェンコ そのように洞察していただければ、今日の会見は実に有意義であると思います。

井原 ところで、閣下は九十六年七月に西側諸国の大使の退去命令を出しましたけれども、その理由は何ですか。どうもこのことが西側のプロパガンダに使われているような気がしてならないのです。

ルカシェンコ 私は西側の大使たちとの問題は何一つないと思っております。退去命令は私たちの国にある規則を守ることに對する彼らの対応の仕方にありました。ウィン・コンピネーション(国際連合)の法則を要求する前にもまず自分が住む国の法律を守るべきだと私は主張します。いずれの大使でも駐在する国の法律は守らなければなりません。西側の大使たちとの交渉は、彼らがそれまで住んでいた大使館を別な場所に移転することにありました。ほぼ三年にわたる交渉でしたが、しかし、大使たちは私たちの依頼を受け入れてくれません。私は外国の大使がプレジデントの官邸に住んでいることはおかしいことだと思います。

最初に大使たちがベラルーシに来られたときに他に適当な場所がなかったものですから、とりあえず、官邸に居住することを許したわけです。そしてそれ以後、私のほうではたいした地が住める異様な十分な条件の整った場所をいくつか用意し、彼らの住んでいた町の改造計画を立てたので、結果において彼らは他へ引っ越すことになったのですが、彼らはその計画に反対したため少し難しい交渉になってしまったのです。

外国の大使がプレジデントの住んでいる場所から五十メートルぐらいしか放れていないところに住んでいるという状況は世界のどこの国でも見られません。

井原 ありえませんか



人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもちたか

ルカシェンコ しかし、大使たちとその裏にいる人たちはこのアクションが必要だったのではないかと私は思っています。おそらく緊迫状態を作ることが一つの目的だったのではないのでしょうか。その意味ではもう十分に成功したでしょう。しかし、彼らは今時分たちが作り出した条件の犠牲者になっているわけです。いずれはこの国に戻って再び機能を果たさなければ、自分自身の任務も遂行できないし顔も立ちません。だから、ベラルーシに戻って仕事を続けるという立場を尊重し、歓迎します。そして立派な住宅を提供し、今すぐにでも住める状態になっています。さらに私たちは外交官に対してはもっといい条件も用意してあります。例えば、ある土地を買い取っていただき、そこに自由な設計に基づいた大使館を建ててくださいとも進めています。ですから近い将来にこの紛争は調整できると思いますが、西側ジャーナリズムがあまりにもこの問題の周辺を拡大化させ、世界に間違った情報を流しているというのが実情です。

井原 なるほど、退去命令というよりも正当な交渉事ですね。大統領閣下の見識と現実的認識を私は十分に理解できました。これがそのまま西側のプロパガンダに利用されることは、アンフェアというほかはありませんね。



経済的奇跡の国・日本を直に視た印象

井原 大統領閣下は1998年2月の第十八回冬季オリンピック長野大会のときに日本を訪問されていますが、日本および日本人の印象はいかがなものだったのでしょうか。

ルカシェンコ 日本については耳学問ではなくお話できます。昔から「百聞は一見に如かず」といいますが、私はユニークな国である日本を訪問し、冬季オリンピックも観戦してきました。率直に申して、実は、私は子供のころから日本を見てみたいと願っていました。世界が「日本の経済的奇跡」と呼んだその正体を、現場に身を置いて解明し理解したかったのです。二十世紀後半に嵐のような経済発展を遂げた日本の希有な現象が、世界の有数のエコノミストたちをしてすっかり考え込ませてしまったのですから。

東京と長野訪問の印象はいまに至っても鮮やかに記憶に残っています。それは、圧倒的な情報媒介力に満ちた巨大なメガロポリスであり、交通網とスポーツ施設のユニークな下部構造であり、大手企業の立ち並ぶビルの群れなどです。私たち外国人を迎えるときの、心のこもった接待と暖かさも非常に印象的でした。しかし、「苦あれば楽あり」という日本の古い俚諺を思い出せば、そこにはなんの不思議もありません。まったくあなた方はすばらしい成功を収めました。それは、類まれな勤勉と忍耐、さらに伝統的なあなた方のすばらしい集団と他国民の成果を創造的に学んで応用する能力のおかげです。これは私たちにも共通しています。ベラルーシ人も忍耐強く勤勉です。

井原 ところがここに来て日本人にはそれらの伝統が希薄になりつつあり、さまざまな分野で亀裂が生じて、混迷しております。特に政治家や企業トップのリーダーシップが発揮されず、二十一世紀を目前にして将来への不安は隠せない現実となっております。

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

ルカシェンコ 日本が一連の困難に遭遇していることは知っております。私たちを含めた全世界にとって、日本の金融・経済システムが持ちこたえられたこと、そしていま日本の指導部が、構造的性格を持ったシステム全体への対応策を、なによりもまず税制の分野で講じていることは重要です。これからの対応策が成功を収めることを祈ります。それから、日本の国民が二十一世紀を第二次世界大戦が残した政治的経済的問題の重荷から抜け出して迎えられることを願っております。「一転に集中すれば不可能も可能になる」という言葉もありますように、やるべきことの目的意識、成功しようという集中力は日本の国民には十分に具わっていると思っています。



高レベルの経済と新の民主主義の確立へ

井原 私が尊敬する偉人の一人にインドのマハトマ・ガンディがおります。彼は人間の「不完全さ」というものを常に凝視した人です。彼のアンヒサー(愛と非暴力)の思想は、人間の「不完全さ」に対する深い洞察から生まれたものです。彼は、こんな言葉を残しております。「愛のほうに従い心理を追及している人は、自分の信仰の不完全さを快く認めるだろう。もしわれわれが心理の全体像を獲得したなら、我々はもはや単に探求者ではなく、神と一つになってしまうだろう。しかし、我々は単なる真理を求める者であるにすぎないのだから探求に従事し、我々自身の不完全性に気づいているのだ。そして、もし我々自身が不完全であるならば、我々が考えた宗教もまた、同様に不完全であるに違いない」(『私にとっての宗教』新評論社刊)

私はこの言葉に常に深い感動を覚えます。二十世紀の歴史には、大変悲惨な戦争や紛争などが多すぎました。戦争や紛争はほとんどの場合、立場の違う正義と正義のぶつかり愛です。主張する正義が互いに教条的であればあるほど、その対立は激しいものになります。ある意味で、二十世紀はイデオロギーの正義と正義が国家や地域を挟んで真っ向からぶつかり合った時代だったといえると思います。

しかしいま、1999年という1900年代の最後のときを向かえ、私たちはこれまでの歴史を謙虚に振り返り、人間自らの不完全さに深く気づき、人間自らが生み出した英知ではあるが、不完全そのもののイデオロギーなどの呪縛から開放されるべきだと思います。

大統領閣下は、この新年を迎えて二十世紀に向けての展望と世界に対するベラルーシの役割についてどのように考えておられるのでしょうか。

ルカシェンコ 今日、わが国の政治が目標としているものは、単一の法治的社会国家を建設することです。あらゆる個人の権利と自由が最大限保障されるような国家の建設です。ベラルーシ共和国憲法には、それらの重要な権利と自由が明記されています。それは決して飾り物としてあるのではなく、実際に保障されているのです。人権と自由をさらに拡大していくことを基本に据えて、ダイナミックで建設的な労働が、経済のあらゆる分野を貫いていくという中で、私たちは二十一世紀を迎えなくてはなりません。これこそが本物の民主主義であり、これこそが進歩的で希望に溢れる社会の必須の条件です。

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

ベラルーシは主権を持った民主国家として、物質的にも論理の上でも労働への高い動機を持って機能する、社会的に方向づけられた市場経済という原則に立脚した社会を築いています。その社会では、市場の法則が自然発生的でも“野蛮”でもなく、生産と配分の効率を保障する規模で機能します。わが国には経済の全体主義的計画はありません。私たちはそもそもの初めから、厳しい司法・行政的な経済管理の道を斥けたのです。

また、私たちは何らかの“主義”を建設しようとするものではありません。私たちの課題は、有機的に保管しあう異なった形態の所有形態……国家的所有も民有も……が現実に共存するようなマルチ制経済を作り出すことです。減退の独立国家が具えているべき経済の高いレベルの発展を達成することを目指しながら、私たちは、平等の立場に立った世界経済との交流に参加することができるようになることでしょう。

井原 大統領閣下がよくおっしゃることは、経済に万能なお手本はない、よいものはすべてとり入れるが模倣はしない、国民経済が復興していくときに他の国の経済方式をベラルーシの土壤に機械的に導入することは、何世代にもわたって蓄積された立派な経験をやみくもに拒否するのと同様に近視眼的であり、前向きではない、ということですね、私はその独立精神といいますが、アイデンティティに共鳴しているのです。

ルカシェンコ 自分たちの運命は自分で決めるということです。その帰結として主権を持った外交を打ち立てるといふ国民の志向が継続されるのは当然でしょう。その外交とは先ほどもいいましたが、ベクトルの多面性という原則に立脚して、何者をも脅かすことなく対話と相互理解のために広く門戸を開いたものであり、国民の利益に従いながら理性的なプラグマチズムを維持するものです。私たちは今後とも平等な国際協力関係のために力を尽くすものですが、私たちを教唆したり、力でねじ伏せようとする試みには反撃します。

現在、世界が二十世紀の入り口に立っているとき、統合こそが、それが小地域レベルであれ大地域レベルであれ、諸国家と諸国家の統一を促し、経済の発展を新しいレベルに導く牽引車となりつつあることがくっきりと浮かび上がっております。CIS 四カ国による関税同盟もその統一基礎をなすものですが、今後は IMF との協力関係を確立して努力を重ねていきます。この道には少なからぬ困難がありますが他の選択はないのです。

二十一世紀のベラルーシは、数十年にわたって国民が獲得してきたものを何も失うことなく、科学性に裏打ちされた生産を維持しながら、高いレベルの社会保障を誇る繁栄した国になるでしょう。このように宣言するに足るだけの根拠が私にはあります。



井原 力強い、ユニークな見解をお示しくださってありがとうございました。ベラルーシ共和国の今後の発展をお祈りします。

人類の希望と未来

冷戦構造集結は世界に何をもたらしたか

井原甲二氏 書籍

「感性命」に生きる実践経営 人は強く生きねばならぬ Chichi select

ふる里ホットいい話し 918KHz こちらゲンキ印山形 Moku books

どっこい人はそれでも生きていく 激変時代の心語集 MOKU BOOKS

感性命 闘いは朝礼から始まる

邂逅 井原甲二対談集 致知選書

2003年7月 黙出版社のご好意により MOKU に掲載されたルカシェンコ大統領と井原甲二氏のインタビュー記事の再現が実現いたしました。この場を借りてお礼申し上げます。

